

アメリカ合衆国における人口移動と都市化の形態

村 山 研 一

我々はアメリカにおける人口移動を長期的に眺める時、次のような流れの存在を指摘することができる。

第一は西への人口の流れであり、アメリカの歴史を通じて東部沿岸から奥（西）へのフロンティアの拡大という事実の端に表われているが、フロンティア消滅後もこのような移動の流れは一貫して続いている。第一回の人口センサス以降、人口重心は一貫して真西へと移動しつづけており、また西部地区においては人口移動は常に純流入の状態を保ち、かつアメリカ合衆国で人口増加率の最も高い地域となっている。

第二には海外からの人口移動をあげることができる。これも世界の経済的・政治的情勢、アメリカ国内の景気循環および移民政策により複雑な波動を描きつつも、一貫して移民の流入は続いて来た。特記すべきは19世紀後半から20世紀はじめにかけての大量のヨーロッパ移民の流入であり、これはアメリカ北部における工業化・都市化に重要な貢献をはたしたと考えることができる。

第三には、20世紀の初頭から大規模な現象としてあらわれてくる南部からの黒人の移動である。この流れも第二のものと同様に工業化・都市化との関連において、すなわち南部の農村から北部の大都市への移動という構図の中で見る必要がある。

第四には都市化の趨勢をあげることができる。この動向は都市への人口集中および都市圏内部での人口の移動といった二つの位相を含みながら、上記の三つの流れと交差していったと考えることができる。

以上あげた流れは19世紀の後半から20世紀のなかばまで一世紀近く続いてきた動きであるが、これにさらに70年代に入ってから新しい動向をこれに付け加える必要がある。それは今までの移動パターンを根底からくつがえす構図を持っており、二重の意味での人口移動の流れの逆転を意味している。第一に、大都市圏からの人口流出、第二に北から南へと人口移動の方向の逆転、いずれも今までの常識とは根本的に背反する新しい動きである。

本稿においては70年代の新しい動きが始まる以前の時期における人口移動のパターンと、都市化との関連について議論を進めてみたいと思う。主題として取り上げるのはヨーロッパからの「新移民」と黒人、この二つの人口集団である。この二つの集団が長期的視点から見るとどのような移動パターンをとっていったのか、また移動の過程の中で各々の集団の都市化はどのように進行していったのか、そして合衆国の都市化において各々の集団はどのような機能を果たしていったのか、このような問題について考察を進めたい。最初に移民集団から取り上げよう。

1. 移民の趨勢と移民政策

1) 自由渡航の時代

アメリカは元来、移民によって作り上げられた国であり、伝統的に移民に対しては（実質的にはヨーロッパ移民に限定されるが）、無制限な受け容れを認めていた。そして19世紀から20世紀のはじめ頃にかけて、ヨーロッパにおける飢饉・不況・動乱等の変動によって生じた過剰人口の吸収先として、アメリカ合衆国は重要な役割を果たすことになった。例えば、1846年から1924年までの間、世界において生じた国際人口移動のうち96%はヨーロッパからの移動であったと推計されている。そのうち、90%まではアメリカ大陸への移住であり、さらに、その2/3に当たる60%は合衆国への移住であった（Rosenblum; 1973, pp. 45-46）。このように移民の波は、送り出し国であるヨーロッパの経済的・政治的変動と、受け入れ国であるアメリカ合衆国における景気変動によって左右されながら、南北戦争前後の産業化の始動の過程において、さらに拡大されていったのである。

ところで19世紀後半においては、単に量的な拡大だけでなく、重要な質的転換が生じている。第一には、移民の主要な受け入れ部門が農業から工業へと変っていったことである。広い大地をかまえるアメリカ合衆国において、工業化の進展の中で慢性的な労働力不足状態が続き、その供給源となったのがヨーロッパの過剰人口であった。第二に、送り出す側についても、従来主流であったアングロ・サクソン系の移民に変わって、東欧・南欧の国々が主要な供給国として登場してきたことをあげる必要がある。合衆国への移民を国別に見るならば、いくつかのステップを経て供給源の移動が生まれていることがわかる。まず1850年前後に、アイルランド移民の波のピークがおとずれる。次に、1850年代前半、1870年前後、1880年代前半と、三回のピークを描きつつドイツからの移民がおしよせている。そして、1890年頃からはイタリア、ポーランド、オーストリア、ロシア等の国々からの移民が急増しだし、20世紀初頭には、それらの「新移民」が圧倒的多数を占めることになる。ヨーロッパにおいて産業化の動きが、中心から周辺へと拡大してゆくにつれて、移民の供給源も地理的に移動していったのである。「19世紀末から20世紀初頭にかけて大西洋沿岸諸国の間に生じた移民の大きな『波』は、第一義的には国際的規模で行なわれた（そして大陸間で行われた）農村から都市への人口移動であり、移民の多くはヨーロッパの社会構造に生じた変動によりその経済的地位を脅かされた農民たちであった。」（Rosenblum; 1973, p. 49）

ここで移民の推移を簡単におさえてみよう（表1）。これは移民局の毎年の統計を五年単位でまとめたものであるが、長期的に見る場合はいくつかの注意が必要である。第一には国境の変更、国の消失等による分類の非一貫性という問題があげられる。第二には国境を接するカナダ・メキシコからの移民については1904年まではその集計はきわめて不十分である¹⁾。さらに、ここであげている数は毎年の入国者数であり、移民の純流入数でないことに留意する必要がある。以上のような問題点はあるが、しかし長期的な移民の動向を見ることは可能である。さてここで、ヨーロッパからの移民にカナダからの移民を加え、これをヨーロッパ系移民と見なす時、ヨーロッパ系移民は第二次大戦までの時期において、ほぼ90%を越えており、移民の波とは実はヨーロッパからの移民であったことを確認することができる。さらに、ヨーロッパからの移民を西欧・北欧からの旧移民と、東欧・南欧からの新移民とに分け

表1 アメリカ合衆国への移民, 1820—1979

年 度	総 計	移 民 数 (千人)				構 成 比 (%)				
		ヨ ー ロ ッ パ				ヨ ー ロ ッパ 計	西欧・ 北 欧	東欧・ 南 欧	ヨ ー ロ ッパ+ カナダ	アジア
		計	西欧・ 北 欧	東欧・ 南 欧	アジア					
1820—25	48.9	35.6	33.7	1.8	0.0	72.8	69.0	3.8	75.3	0.0
1826—30	102.9	70.9	69.4	1.6	0.0	68.9	67.4	1.5	70.1	0.0
1831—35	252.5	175.8	171.7	4.0	0.0	69.6	68.1	1.6	71.3	0.0
1836—40	346.6	319.8	317.9	2.0	0.0	92.3	91.7	0.6	95.0	0.0
1841—45	430.3	409.2	407.0	2.2	0.0	95.1	94.6	0.5	97.7	0.0
1846—50	1282.9	1188.3	1185.1	3.2	0.0	92.6	92.4	0.3	95.0	0.0
1851—55	1748.4	1686.8	1677.5	9.4	16.7	96.5	95.9	0.5	98.4	1.0
1856—60	849.8	765.8	753.9	12.0	24.8	90.1	88.7	1.4	93.1	2.9
1861—65	801.7	727.9	718.3	9.7	24.3	90.8	89.6	1.2	95.0	3.0
1866—70	1513.1	1337.4	1313.4	24.0	40.3	88.4	86.8	1.6	96.3	2.7
1871—75	1726.8	1460.6	1366.7	93.9	65.7	84.6	79.1	5.4	95.1	3.8
1876—80	1085.4	705.5	597.5	108.0	58.1	65.0	55.0	10.0	83.5	5.4
1881—85	2975.7	2506.1	2153.8	352.2	60.4	84.2	72.4	11.8	97.4	2.0
1886—90	2270.9	2231.0	1624.8	606.2	7.9	98.2	71.5	26.7	98.3	0.3
1891—95	2123.9	2073.7	1143.1	930.6	19.3	97.6	53.8	43.8	97.7	0.9
1896—00	1563.7	1485.3	500.4	984.9	52.2	95.0	32.0	63.0	95.1	3.3
1901—05	3833.1	3645.0	682.8	2962.2	115.9	95.1	17.8	77.3	95.3	3.0
1906—10	4962.3	4491.0	971.5	3519.5	127.6	90.5	19.6	70.9	94.0	2.6
1911—15	4459.8	3795.8	789.9	3005.9	123.7	85.1	17.7	67.4	93.1	2.8
1916—20	1276.0	580.8	207.5	373.2	68.8	45.5	16.3	29.3	75.9	5.4
1921—25	2638.9	1689.4	703.0	986.4	78.6	64.0	26.6	37.4	84.5	3.0
1926—30	1468.3	788.5	571.9	216.5	18.8	53.7	39.0	14.7	79.9	1.3
1931—35	220.2	134.9	64.5	70.4	7.1	61.2	29.3	32.0	84.9	3.2
1936—40	308.2	213.4	134.1	79.3	8.8	69.2	43.5	25.7	87.6	2.8
1941—45	171.0	53.1	41.2	11.8	3.3	31.0	24.1	6.9	74.3	1.9
1946—50	864.1	568.6	448.6	120.1	32.9	65.8	51.9	13.9	79.5	3.8
1951—55	1087.6	628.2	387.1	241.1	45.6	57.8	35.6	22.2	72.7	4.2
1956—60	1427.8	700.1	450.9	249.2	104.1	49.0	31.6	17.4	64.1	7.3
1961—65	1450.3	531.3	345.0	186.2	104.3	36.6	23.8	12.8	53.4	7.2
1966—70	1871.4	598.4	240.4	358.0	317.2	32.0	12.8	19.1	41.1	16.9
1971—75	2039.9	440.8	133.9	306.9	628.0	21.6	6.6	15.0	25.7	30.8
1976—79	1922.6	287.4	126.2	161.2	724.1	14.9	6.6	8.4	18.8	37.7

U. S. Bureau of the Census ; 1975, 1981 による。

て数字の推移を追って見よう²⁾。図1に鮮かに示されるように、19世紀末の時点で、二つの集団は全く正反対の傾斜を示しながら交差していることに、移民の動向が大きく転換していることを見ることができる。このようにして、アメリカ合衆国への移民の供給源がほとんどヨーロッパであることは変らないものゝ、世紀の転換点において、移民の質がそれまでのアングロ・サクソン系の「正統」的なものから離れる傾向が顕著になってきた。

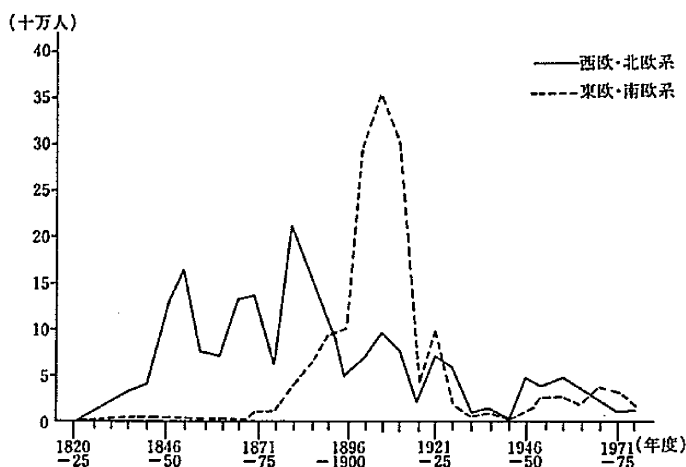


図1 ヨーロッパからの移民

2) 移民制限の時代

移民の大量流入およびその文化的背景の変化は、当然のことながらアメリカ国内に大きな摩擦を引き起こすことになった。まず第一に、保守的な立場から、プロテスタンティズムの価値観を守るために移民制限の主張が生まれる。さらに、労働団体からは、労働条件の低下を防ぐために同様の主張が出されてくる。かくして、19世紀末からは様々な移民制限立法が行われはじめ、大戦間のアメリカは完全な移民制限の時代に入るのである。(簡単な経緯に関しては Auerbach ; 1955, Chap. 1 を参照。)

本来の意味での移民制限が合衆国議会において初めて立法化されたのは1875年であり、この年、犯罪者・売春婦の入国拒否が決定される。これを皮切りにして何回かの法改正により規制条件は拡大してゆくのであるが(精神病患者等の入国拒否、契約労働の制限、入国人頭税の設定)、大量の移民をくい止める上では大きな実効を持ち得なかった(Wittke ; 1949, Woofert ; 1933 等を参照)。移民制限を効果あるものとしたのは、1921年の「割当法(Quota Law)」であり、新しい原則による移民規制策によって移民は新時代を迎えるのである。それまでの規制策が移民の総量には手を触れず、排除する要件のみを設定していたのに対して、この法は移民の総量の上限を移出国別に設定した。各国の割当数は、一年について、1910年の人口センサスにおける各国別出身住民の3%以内に決定されたのである。さらに1924年の改正により、割当の規準は1890年人口センサスの各数値の2%以内へと改変された³⁾。このような改正により最も大きな影響をこうむったのは、当然のことながら東欧・南欧からの移民である。割当法体制下において、移民の数は急激に減少してゆくと共に、旧移民が再び新移民を数の上で追い越すようになる(表1参照)。これに加えて移民制限をさらに実効あるものとしたのは30年代の長期にわたる不況であり、合衆国への大移動はここに終りを告げたのである。

我々は今まで「新移民」に関連しながら移民制限について述べてきたが、しかし「移民問題」は現実にはもう一つの核を持っていたと付け加える必要がある。「割当法」の焦点となっていたのは東部・北部に流入してきた新移民であったが、これに対して西部においては東

洋人が問題の焦点となっていた。ここで再び移民統計に戻るならば、それまでは皆無に近かったアジアからの移民は、50年頃から現われ出し、51年からの5年間の間におよそ1万7千人がアメリカに流入している。このほとんどは中国人であるが、この時期に新しい移民パターンが生まれたのには、西部の開発が大きく影響している。まず最初にゴールド・ラッシュが西部に人を集め、次に西部における鉄道建設が多量の労働力需要を生み出した。国内交通路の未発達、海路からの人員補給ルートを成立させることとなった。しかも、中国からのルートの方が労働力をはるかに安価に供給できたのである。

このようにして最初は中国人が、その次には日本人が海を越えて渡ってきたが、未熟練労働を主体とする東洋人労働力の存在は不況期に入るたびに白人労働者の攻撃的となり、東洋人排斥運動をうみだすこととなる。かくして1882年には中国人移民禁止法が成立し、日本に対しては紳士協定という形態により移民制限が実行された(1907年)。東洋人に対する移民規制はさらに東アジアを移民禁止ゾーンに設定することにより強化され(1917年)、1924年の移民法改正により道は完全に閉ざされてゆく(McKenzie; 1928)。⁴⁾

このように移民問題は二重の焦点を持っていたのであり、東欧・南欧からの移民に対しては割当法により、東洋からの移民に対しては排除法により、二重の方法で「移民問題」の解決が計られたのである。

3) 第二次大戦後

第二次大戦の終息とともに、それまでの移民制限は幾分緩和のきざしを見せはじめる。移民制限の一つの焦点である東洋人の排除に対して、1943年には中国人排除法が撤廃され、わずかながら中国人の割当てが認められたのをはじめとして、1946年にはさらに他のアジアの国々にも割当てが設定されてゆく。すなわち形式の上で移民制限の二重性が一元化され割当制へと統合されていったわけである。

さらに第二次大戦の戦禍とその後の冷戦体制は、移民政策に新たな機能をもたらすこととなった。まず1948年には難民救済法が、1953年には亡命者救済法が成立し、割当ての枠外で難民の受け入れが行われるようになる。すなわち、「今世紀においてはじめて、制限的・排除的立法はゆるめられ、この国への亡命者受け入れは容易になったのである。」(Reimer; 1981, p. 2) 1950年代の移民政策の特徴を一言で言うならば、形式的には割当制が維持されながら、割当外移民のルートが開かれてゆき拡大してゆく過程であったと述べることができる。これ以後、動乱は枠外移民を生み出し、また枠外での移民は様々な特例を生み出し、割当制の廃止へと向う1965年頃には全移民のうちの2/3は割当外の移民の占めるところとなっていた。

このように割当制は戦後も維持されてはいたのであるが、しかし十数年の間に大きく変質していたのである。このような現実の変化の後を追うように、1965年の立法によって割当制から優先制(preference system)への切り換えが実行された。この新政策においては、国別の割当は一切廃止され、東洋からの移民17万人、西洋からの移民に12万人という大枠だけを残し、移民の選定に当たってはいくつもの条件を設け、その条件に合致する者に対して優先的に許可を与えることとなった⁵⁾。

ここで1965年前後において現われてくる重要な変化を一言で述べるならば、ヨーロッパからの移民のシェアの低下である。それまではほぼコンスタントに90%以上を占めていたヨーロッパ系移民(カナダを含む)の比率は、戦争前後の時期から中南米移民の増加によって低下

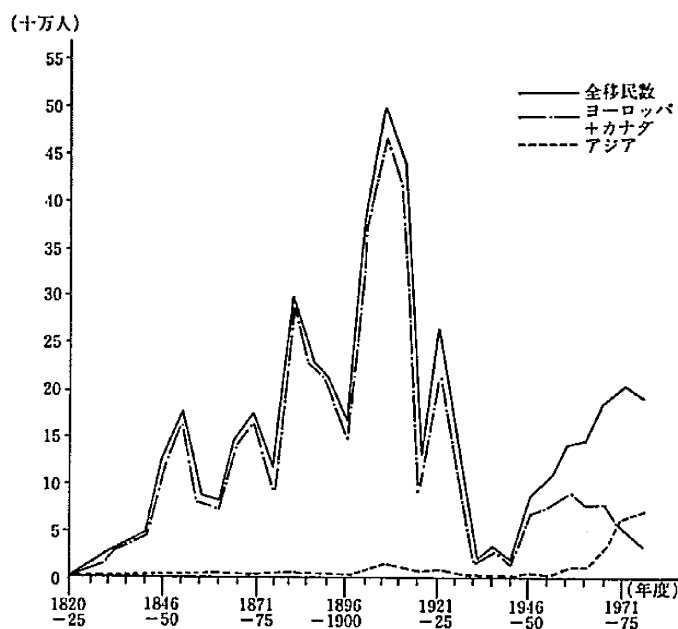


図2 ヨーロッパ系移民とアジア系移民

してゆくが、60年以降の低下は劇的ですからあり、70年代末には20%を割ってしまう。これに対して50年代後半から東洋系移民が増えはじめるが、優先制の下でその増加は急激であり、70年代前半にはヨーロッパ系移民を追い抜いてしまう(図2参照)。このような構成の変化は、一つにはベトナム戦争後の難民受け容れを反映するものであるが、しかしより一般的には国際人口移動の構造的変化を意味するものであろう⁹⁾。

2. 合衆国における移民人口の構成と移民の都市化

以上で見てきたように、アメリカ合衆国への移民の流れは三つのサイクルを描いて来た。第一には、旧くからのアングロサクソン系の移民。さらにそれが拡大された形態では、西欧・北欧からの移民(いわゆる旧移民)。第二のサイクルは、19世紀末から20世紀初頭にかけての新移民である。そして、大戦間の移民停止期をはさんで、第二次大戦後には非ヨーロッパ系移民が第三のサイクルとしてあらわれてくる。

ここでは焦点を第二のサイクルに据えることにしたい。すなわち、人口移動が70年の新しい局面に入る以前の、古典的なイメージで語りうる都市化の時期における移民のサイクルである。資料的には1870年から1950年頃までを射程に入れる。

先の節でかかげた移民数は毎年の入国者数であり、純流入数ではない。世紀転換期の新移民が持つ特徴の一つは定着率が低く、出稼ぎ的性格を持つものが多かったから⁷⁾、前の数字をそのまま純流入数に投影させることはできない。ここで人口構成において移民人口がどのような位置を占めてきたのかを見ながら、移民が米国社会に与えたインパクトを跡づけてみたい。

まず最初に移民人口数の変遷を見よう。人口センサスにおいては、白人人口について次の

表2 移民系白人人口の推移

(単位 千人)

	(1) 全白人人口	(2) 移民系 白人人口	(2-A) 外国生れ 白人	(2-B) 両親もしくは 片親が外国生 れの合衆国生 れ白人	白人人口に占める割合 (%)		
					(2)/(1)	(2-A)/(1)	(2-B)/(1)
1870	33,589	10,818	5,494	5,324	32.2	16.4	15.9
1880	43,403	14,835	6,560	8,275	34.2	15.1	19.1
1890	55,101	20,626	9,122	11,504	37.4	16.6	20.9
1900	66,809	25,860	10,214	15,646	38.7	15.3	23.4
1910	81,732	32,243	13,346	18,898	39.5	16.3	23.1
1920	94,821	36,399	13,713	22,686	38.4	14.5	23.9
1930	110,287	39,886	13,983	25,902	36.2	12.7	23.5
1940	118,702	34,577	11,419	23,158	29.1	9.6	19.5
1950	134,478	33,674	10,095	23,578	25.0	7.5	17.5
1960	158,838	33,078	9,294	23,784	20.8	5.9	15.0
1970	179,119	31,888	8,734	23,154	17.9	4.9	13.0

1950年まではアラスカ、ハワイを含まず。

(出典) 1950年までは Hutchinson ; 1956. 1960, 1970年は各年度人口センサスより。

表3 ヨーロッパ生れの白人人口

	人 口 (千人)			構 成 比 (%)	
	ヨーロッパ生 れの白人	西欧・北欧	東欧・南欧	西欧・北欧	東欧・南欧
1850	2,032	2,021	11	99.5	0.5
1860	3,806	3,748	56	98.5	1.5
1870	4,937	4,815	120	97.5	2.4
1880	5,744	5,461	279	95.1	4.9
1890	8,021	7,166	842	89.3	10.5
1900	8,872	6,866	2,003	77.4	22.6
1910	11,788	6,548	5,227	55.6	44.4
1920	11,878	5,515	6,352	46.4	53.5
1930	11,743	5,336	6,383	45.4	54.4
1940	9,701	4,063	5,617	41.9	57.9
1950	8,268	3,311	4,941	40.0	59.8

Carpenter ; 1927 および U. S. Bureau of the Census ; 1975 より作成。

二グループの集計が従来から、移民系人口に関する数字として利用されてきた。第一は「外国生れの白人 (foreign-born white)」であり1850年より、第二は「両親もしくは片親が外国生れの、合衆国生れの白人 (native white, foreign-born or mixed parentage)」であり1870年より、それぞれ限られた項目に関してではあるが集計されている。ここでは1870年以降の移民系白人（ここでは両グループを包括してこう呼ぶことにする）の人口の推移を見ると(表2)、実数では1930年にピークが、全白人人口に占める構成比の上では1910年にピークが訪れているのがわかる。すなわち、移民系人口は移民制限後の1930年まで増加しつづけたが、しかし非移民系白人の増加速度以上の速さで増加していったのは1910年までである。

第一世代（外国生れ）の増加は1910年ではほぼ頭打ちとなり、1930年以降は死亡・帰国による減少が移民の流入を上回り、実数は減少の一途をたどってゆく。第二世代（合衆国生れ）は20年ほどずれて、1930年まで急速に増大しつづけるが、実数の増加はそこで停止する⁸⁾。

それでは、移民の内部において新移民と旧移民の構成はどうなっているのか。表3によりピークに到る過程での構成の変化は明らかであろう。1890年まではヨーロッパ移民の90%は旧移民が占めていた。しかし旧移民はこの年を境にして減少し出す。これに対して新移民はこの前後から急激に増加し、ピークの1920年前後にはヨーロッパ生れの白人のうち半分以上を占めるほどになっている。これに対して第二世代の比較は時系列的には困難であるが、1920年の時点では西欧・北欧系が1288万人、東欧・南欧系が612万と旧移民系が優位にある。また1910年から1920年までの10年間に、旧移民系の自然増加は151万人、これに対して新移民系は34万人と差は大きくなる（Carpenter; 1927, Chap. V）。旧移民では第二世代が第一世代の二倍半ほどの構成であるのに対し、新移民においてはほぼ同数であり、すでに流入から定着へと移っていた前者と、流入から定着への転換点にあった後者とのちがいがはっきりとあらわれている。

それでは、アメリカへと流れ込んだ移民はどのように分布していったのか。ここで地域（四地域）への分布と、都市・農村への分布という二つの側面から見よう。まず地域別分布について見るならば、1870年から1950年までの期間について、移民（第一世代に限定）の多くは北部に集中していることがわかる。1870年には88%が北部に集中し、このような集中状態は1900年まではほとんど変わらないが、それ以後は中北部の割合が幾分漸減し、それに代って西部のシェアが少しずつ拡大している。それゆえ、我々はここで合衆国への移民とは北部への移民であったこと、さらに、そのあとでおそらくは北部に滞留した移民群の中から西部への移動が一つの支流としてでき上がったであろうと考えることができる。

次に移民人口の都市化について眼を転じて見よう。我々が扱っている期間については都市人口（urban population, 2,500人以上の規模をもつコミュニティに住む人口）によるしか都市化の進展は計れないので、それを利用することにしよう⁹⁾。地域ごとの都市人口率にはかなり大きな差があるが、まず一目で気がつく特徴はいずれの地域においても外国生れのグ

表4 合衆国における外国生れ白人人口の地域別分布状態 1870—1950

	実 数 (千人)					各 地 域 へ の 分 布 (%)			
	合衆国	北東部	中北部	南 部	西 部	北東部	中北部	南 部	西 部
1870	5,494	2,518	2,331	395	250	45.8	42.4	7.2	4.5
1880	6,559	2,808	2,912	442	397	42.8	44.4	6.7	6.1
1890	9,122	3,875	4,054	521	673	42.5	44.4	5.7	7.4
1900	10,214	4,739	4,152	562	761	46.4	40.6	5.5	7.4
1910	13,345	6,640	4,680	726	1,298	49.8	35.1	5.4	9.7
1920	13,713	6,783	4,595	847	1,487	49.5	33.5	6.2	10.8
1930	13,983	7,109	4,347	801	1,727	50.8	31.1	5.7	12.4
1940	11,419	6,021	3,349	626	1,424	52.7	29.3	5.5	12.5
1950	10,161	5,194	2,712	758	1,498	51.1	26.7	7.5	14.7

各年度人口センサスより

表5 都市人口の比率(白人)

1. 合衆国生れの白人(%)

	合衆国	北東部	中北部	南部	西部
1870	22.4	37.7	16.8	10.8	21.0
1880	25.8	44.6	20.9	11.4	25.0
1890	32.8	53.7	29.5	15.3	35.6
1900	37.8	61.2	35.5	17.3	39.4
1910	43.5	67.1	41.7	22.1	47.9
1920	49.5	71.9	48.9	28.1	51.8
1930	54.5	74.3	54.7	34.1	58.2
1940	55.1	73.8	55.7	36.2	57.8
1950	57.4	72.1	57.9	43.3	58.1

各年度人口センサスより

2. 外国生れの白人(%)

	合衆国	北東部	中北部	南部	西部
1870	53.6	68.7	37.0	60.0	45.7
1880	55.5	75.2	37.6	53.7	49.8
1890	60.5	77.5	47.1	56.4	46.2
1900	65.5	81.8	51.9	52.7	48.2
1910	71.2	84.2	60.3	53.2	54.0
1920	75.3	86.3	67.9	57.9	58.1
1930	79.2	87.7	74.0	63.1	64.8
1940	80.0	87.1	74.9	68.3	67.1
1950	79.5	85.6	76.9	67.7	68.9

ループの都市人口率の方が、合衆国生れのグループよりも一貫して高くなっていることである。1870年には合衆国生れの白人の都市人口率は最も高い北東部で38%、最低の南部で11%、合衆国全体では22%にすぎなかったが、外国生れの白人の場合はいずれの地域でも2倍以上(南部では5,6倍)の都市人口率を示している。これ以降合衆国の都市化は急速に進み、合衆国生れの白人の都市人口率も上昇してゆくが、しかし外国生れの白人の都市人口率の方が絶えずそれを上回り、都市化はるかに進んだグループであることには変らない。

このような移民の都市集中傾向は、都市の人口構成を規模別に比較してみた時さらにはっきりとする。表6は移民の流入がピークであった時に最も近い1920年の時点で、人口の構成を移民系、非移民系に分けてみたものである。農村においては白人が86%を示め、そのうちの66%が非移民系住民と圧倒的に多く、移民系白人は残りの20%にすぎず、特にその中で外国生れのものは6.5%でしかない。しかし、集落の規模が大きくなるにつれて、非移民系住民の割合は一貫して減少し、逆に移民系住民は(第一世代も第二世代も)一貫して増加してゆく。最大規模の50万人以上の都市においては、人口構成はまったく逆転し、66%が移民系住民の占めることとなり、非移民系住民は29%にすぎなくなる。

以上の事実より、非移民系住民に比べて移民系住民ははるかに都市化の進んだグループであったと結論することができる。すなわち、移民系住民は都市化の進んだ北部に集中し、都市人口率は非移民系住民よりもはるかに高くなっており、そして大規模な都市になるほど移

表6 移民系、非移民系白人人口の集落規模別構成比(1920)

(%)

	農 村	都 市			
		2,500— 25,000	25,000— 100,000	100,000— 500,000	500,000—
白 人 合 計	86.0	92.9	92.8	91.1	95.3
(1) 非 移 民 系 白 人	65.9	58.1	49.3	45.7	29.3
(2) 移 民 系 白 人	20.1	34.8	43.4	45.4	66.0
a. 外国生れの白人	6.5	12.5	16.9	17.2	28.4
b. 阿根もしくは片親が外国 生れの合衆国生れの白人	13.6	22.3	26.5	28.2	37.6

Carpenter; 1927, pp.22—23より

民系住民の構成比は非移民系住民よりもはるかに高くなる傾向を見せた。このような特徴は、集中化という形で進行した都市化の様態に対応するものであり、我々はこの時期における都市化の第一の荷い手として移民系人口をとらえる必要があるだろう。

3. 黒人の人口移動と都市化

20世紀初頭におけるもう一つの人口移動の流れ、すなわち黒人人口の北部への移動は、南北戦争後から1960年代まで一貫して続いていることを知る事ができる(後出、表11-13)。しかしそれが大きな流れへと転換したのは1910年代である。この時期に入って、黒人の北部への移住者数が飛躍的に増大するだけでなく、それまで主流であった短距離の移動(州内および隣接州への移動)に代って、長距離の移動(南部から遠隔の北部諸州への移動)の比重が増大したことが重要な特徴としてあげられる(Kennedy; 1930, pp. 30-31)。別な表現を使うならば、1910年代には黒人の移動が一種の‘Exodus’として発現したことを指摘できる。それでは何故、奴隷解放後五十年近く経たこの時期に大量の移動が生まれたのか。その理由を一言で述べるならば、第一次世界大戦が南部においてそれまで潜在的に存在していたブッシュの要因に実現の機会を与えたからである。

ブッシュの要因として第一にあげなければならないのは、南部において黒人が置かれている状況である。南北戦争後の南部社会の再建過程の中で、白人と黒人の人種関係は、黒人に対する全面的な法的・社会的差別として確立していった。例えば法廷・警察における差別待遇、教育条件の劣悪さ、居住条件・生活条件の劣悪さなどであり、彼らは生活を送りながら絶えずリンチの恐怖に怯えなければならなかった。当然のことながら黒人の就業は限定され、白人よりも劣悪な労働条件かつ低い賃金に甘んじなければならなかった。

このような構造に加えて、1915年以後数年、南部の棉作地帯は虫害・悪天候などにより大きな打撃を受けることとなった。南部のブラックベルトの黒人は、解放後もその多くは農業労働者としてもしくは小作農として棉作に従事しつづけたが、数年続きの不作は、結局彼らに対して経済的打撃を与えることとなった。

ところでこのような状態に置かれているにもかかわらず、逆になぜそれが大規模な移動につながらなかったのか。「その答は、北部は黒人達により大きな権利を与えてくれたが、しかし生活の糧は与えてくれなかったというきびしい現実にある。」(Scott; 1920, pp. 16-17) 北部では、急速に工業化が進展し多数の労働力が必要とされたが、しかし黒人たちが就業可能な未熟練労働は主としてヨーロッパからの移民によって独占されていた。また熟練労働の分野においては労働組合の壁が立ちはだかっていた。それゆえ、彼らの就業先は北部においては家事サービスに限定されざるを得なかった。

しかし第一次大戦の勃発はこのような状態をすっかり変えてしまう。大戦によりヨーロッパからの移民はとだえてしまい、拡大しつつある経済生産に必要な労働力の供給は不足状態となってしまう。そればかりか、戦争は移民労働力の引き上げすらうみだしてしまう。その結果、労働市場において労働力の上昇移動が生じ、労働力不足は未熟練労働の部門に集中する。かくして資本家はその供給源を南部の黒人に求めざるを得なくなり、黒人に対しても工業部門における雇用が開かれていったのである。第一次大戦の期間、北部からの黒人労働力の集団的雇用、新聞などによる宣伝・報道などが呼び水になり、黒人が潜在的に持っていた

南部からの脱出願望は実現の可能性を与えられていった。このような脱出者の北部都市への定着により、北部に関する情報回路が南部における黒人コミュニティ内部にパーソナルな形で開けてゆく。かくして、この回路を通じて家族や近隣が北部に引きよせられ、遂にはコミュニティ自体が移住する例も現われるほど、移住運動は一種の熱狂を帯びた宗教的 Exodus となっていた。

このような移動の流れは、熱狂が鎮静したあとも、景気の動向に影響をうけつゝも、量的に減少することなく定着していったのである¹⁰⁾。これは、第一には黒人が大量に未熟練労働力として北部の都市に定着し黒人社会を形成してゆくことにより、開けた回路は恒久的なものとなり、さらには拡大して行ったからであるが、しかし1920年代の移民政策も黒人の移動には有利に作用したと考えられる。すなわち、1921年の移民法以降のヨーロッパ移民の制限により、黒人の就業にとって有利な条件は一時的なものとして終らず第一次大戦後も継続し得たのである。黒人の北への移動は、不況の30年代に幾分縮むものの、第二次大戦は新たな誘因を産み出し、前に勝る規模での移動が、60年代まで続くのである。

ここで黒人の北部への移動の流れを簡単に押さえるために、人口センサスにおける黒人人口の推移を眺めて見よう。表7に四地域における黒人人口が掲げているが、それを地域的分布状態から眺めた場合、我々は次のような傾向を知ることができる(表8参照)。第一に、19世紀を通じて黒人の地域的分布は不変であり、南部にはほぼ90%の黒人が住みつき、残り

表7 地域別黒人人口 1790—1970 (千人)

	合衆国	北東部	中北部	南部	西部
1790	757	67	—	690	—
1800	1,002	83	1	918	—
1810	1,378	102	7	1,268	—
1820	1,772	114	18	1,644	—
1830	2,329	125	42	2,162	—
1840	2,874	142	89	2,642	—
1850	3,639	150	136	3,352	1
1860	4,442	156	184	4,097	4
1870	4,880	180	273	4,421	6
1880	6,581	229	386	5,954	12
1890	7,489	270	431	6,761	27
1900	8,834	385	496	7,923	30
1910	9,828	484	543	8,749	51
1920	10,463	679	793	8,912	79
1930	11,891	1,147	1,262	9,362	120
1940	12,866	1,370	1,420	9,905	171
1950	15,042	2,018	2,228	10,225	571
1960a	18,860	3,028	3,446	11,312	1,074
1960b	18,872	3,028	3,446	11,312	1,086
1970	22,581	4,344	4,572	11,970	1,695

表8 黒人人口の地域別分布状態 (%)

	北東部	中北部	南部	西部
1790	8.9	—	91.1	—
1800	8.3	0.1	91.6	—
1810	7.4	0.5	92.0	—
1820	6.4	1.0	92.8	—
1830	5.4	1.8	92.8	—
1840	4.9	3.1	91.9	—
1850	4.1	3.7	92.1	0.0
1860	3.5	4.1	92.2	0.1
1870	3.7	5.6	90.6	0.1
1880	3.5	5.9	90.5	0.2
1890	3.6	5.8	90.3	0.4
1900	4.4	5.6	89.7	0.3
1910	4.9	5.5	89.0	0.5
1920	6.5	7.6	85.2	0.8
1930	9.6	10.6	78.7	1.0
1940	10.6	11.0	77.0	1.3
1950	13.4	14.8	68.0	3.8
1960a	16.1	18.3	60.0	5.7
1960b	16.0	18.3	59.9	5.8
1970	19.2	20.2	53.0	7.5

1790より1960 aまではハワイ、アラスカを含まず。

1960 b, 1970は両州を含む。(以下同様)

各年度人口センサスより。

前表より作成。

表9 黒人人口の増加率, 1870—1970

(%)

	合 衆 国	北 東 部	中 北 部	南 部	西 部
1870 —1880	34.9	27.2	41.4	34.7	100.0
1880 —1890	13.8	17.9	11.7	13.6	125.0
1890 —1900	18.0	42.6	15.1	17.2	11.1
1900 —1910	11.3	25.7	9.5	10.4	70.0
1910 —1920	6.5	40.3	46.0	1.9	54.9
1920 —1930	13.6	68.9	59.1	5.0	51.9
1930 —1940	8.2	19.4	12.5	5.8	42.5
1940 —1950a	16.9	47.3	56.9	3.2	233.9
1950b—1960a	25.4	50.0	54.7	10.6	88.1
1960b—1970	19.7	43.5	32.7	5.8	56.1

表7より作成。

の10%が北部に住んでいた。この分布状態は1920年以降大きく変化してゆく。1910年代に南部のシェアが5%近く下落したのを皮切りに、センサスごとに数パーセントのシェア低下が見られる。そして遂には、1970年の南部のシェアは半分までに減少してしまうのである。これに対してシェアを拡大していったのは北部であり、第二次大戦後はこれに西部が加わる。このように全体の構成比から見て黒人の地域的分布は1910年を境として全く対照的な動向を見せていることを確認することができる。

以上のような傾向は、各期における人口増加率を地域ごとに比較することでも見出される(表9)。1910年までは合衆国の黒人増加率と南部の増加率はほとんど差を見せることなく平行して進んでいるのを知ることができる。北東部においては増加率が1890年より急激に高まりつつあるが、しかし南部のシェアが圧倒的に高いために合衆国全体の動向と南部の動向の間にはずれが現われていない。しかし1910年以降は両者の間に明瞭な乖離が現われている。このように増加率の観察の上からも、黒人の地域間移動における二つの位相を確認することができる。1910年代に解放された北部への移動運動は、あとで見るように1970年の時点まで半世紀もの間絶えることなく続くのである。

それでは黒人の移動の過程の中で都市化はどのように進んでいったのか。まず最初に再確認しておくべき事は、移動以前においては黒人の大部分は南部に居住し農業に従事していたという事実である。表10でわかるように1910年までの黒人の都市人口率は13%から27%へと推移しているが、この数字は合衆国生れの白人の都市人口率よりもはるかに低い。これは南部における農村人口率が90—80%ときわめて高いこと、かつ黒人の大部分が南部に集中しているからである。大移動が始まったあとの1920年からは両者の差は縮まってゆき、1950年には逆転する。もう一つの顕著な特徴は、南部と他の地域との間の鋭い対照である。これは特に白人と比較する時にはっきりとしてくる。今、北東部の都市人口率を、黒人と外国生れ白人との間で比較すると1870年から1910年までの間は外国生れ白人の方が高いが1920年には逆転し両者の差は開いてゆく。かつ外国生れの白人は1930年以降、都市人口率を低下させてゆくが、黒人の方はなおも増大し続けてゆく。前者の都市人口率低下はおそらく郊外化の影響によるものと思われるが、黒人においては都市集中の傾向の方が強くあらわれているので

表10 都市人口率（黒人），1870—1970

（％）

	合 衆 国	北 東 部	中 北 部	南 部	西 部
1870	13.4	53.9	37.2	10.3	48.3
1880	14.3	62.8	42.5	10.6	50.0
1890	19.7	69.8	55.8	15.3	54.1
1900	22.6	76.8	64.4	17.2	68.0
1910	27.3	81.4	72.7	21.2	78.0
1920	34.0	86.9	83.4	25.2	76.2
1930	43.7	89.0	87.8	31.7	82.7
1940	48.6	90.1	88.8	36.5	82.9
1950a	59.6	91.8	91.5	45.1	79.3
1950b	62.4	94.0	93.7	47.8	90.1
1960a	73.2	95.7	95.7	58.4	93.1
1960b	73.2	95.7	95.7	58.4	92.6
1970	81.3	97.0	97.3	67.4	96.9

1950 a までは旧定義による。1950 b 以降は新定義。

1960 a まではハワイアラスカを含まず。

ある。

黒人は南部においては白人の二グループよりも都市化の遅れたグループであった。大移動の時期においては南部の農村の黒人が都市へと向う。しかし彼らが目指す都市はもはや南部の都市ではなく、北部の大都市である。そしてこのような北部の都市へ向う移動の流れはますます大きなものとなってゆく（Price；1969等を参照）。かくして黒人が脱出していった北部（および西部）においては、彼等は最も都市化の進んだグループとなっていった。1970年の数字は、南部以外の地域に住む黒人のほとんどすべてが都市居住者であることを意味している。黒人の北への移動は同時に農村から都市への移動であり、また黒人の都市化は北へ向うことによって徹底的な実現を見たのである。

4. 人口移動と都市化のパターン

これまで我々は主として人口センサスによりながら、二つの人口グループ（移民グループおよび黒人グループ）の動向について推測を重ねて来た。しかしこれまで明らかになったのは移動の大まかな方向にしかすぎない。ここで我々は、これまで考察の範囲には含めなかった「合衆国生れの白人（native white）」も対象として考察し、三グループの移動パターンの差、および都市化パターンの違いについて考えて見たい。

ところで、人口移動については、全国レベルにわたるファーストハンドのデータは存在していない。しかしながら我々は、ここで取り扱っている期間に関して、二種類の推計値を利用することができる。第一には、国勢調査局の人口調査（Current Population Survey）によって定期的に行われているもので、我々は黒人および白人についての純移動数を手に入れることができるが、しかしこのデータが利用できるのは1940年以降である¹¹⁾。それ以前の時期に関しては、クズネッツらの共同研究によるものが合衆国レベルにおいて最も長期的なもの

表11 国内人口移動（純移動）の推計 I,
1870—1950（実数）（千人）

(1) 総計

	合衆国	北東部	中北部	南部	西部
1870—1880	1,874	332	991	117	434
1880—1890	3,760	1,408	1,659	-199	892
1890—1900	2,886	1,817	529	-38	578
1900—1910	5,189	2,688	401	17	2,083
1910—1920	2,887	1,298	1,070	-822	1,341
1920—1930	2,443	1,502	572	-1,499	1,868
1930—1940	-121	79	-714	-796	1,310
1940—1950	974	-113	-576	-1,876	3,539

(2) 合衆国生れの白人

	合衆国	北東部	中北部	南部	西部
1870—1880	—	-366	27	82	256
1880—1890	—	-227	-44	-284	554
1890—1900	—	86	-445	-15	372
1900—1910	—	-188	-1,109	-76	1,374
1910—1920	—	-170	-143	-565	881
1920—1930	—	-178	-463	-704	1,346
1930—1940	—	-156	-746	-350	1,250
1940—1950	—	-880	-1,297	-645	2,822

(3) 外国生れの白人

	合衆国	北東部	中北部	南部	西部
1870—1880	1,876	669	922	108	177
1880—1890	3,754	1,582	1,673	163	336
1890—1900	2,888	1,603	926	156	203
1900—1910	5,187	2,766	1,446	289	686
1910—1920	2,890	1,257	935	268	430
1920—1930	2,446	1,270	613	82	481
1930—1940	-119	33	-120	-38	6
1940—1950	975	284	94	236	361

(4) 黒人

	合衆国	北東部	中北部	南部	西部
1870—1880	—	28	43	-71	0
1880—1890	—	52	28	-80	0
1890—1900	—	127	49	-174	0
1900—1910	—	111	63	-197	20
1910—1920	—	212	280	-525	30
1920—1930	—	409	427	-877	41
1930—1940	—	203	152	-407	55
1940—1950	—	484	625	-1,468	355

Eldridge & Thomas ; 1964 より再集計。

表12 人口移動率（純移動率）の推計
1870—1950（%）

(1) 総計

	合衆国	北東部	中北部	南部	西部
1870—1880	4.9	2.7	7.6	1.0	43.8
1880—1890	7.5	9.7	9.6	-1.2	50.5
1890—1900	4.6	10.4	2.4	-0.2	18.6
1900—1910	6.8	12.8	1.5	0.1	50.9
1910—1920	3.1	5.0	3.6	-2.8	19.6
1920—1930	2.3	5.1	1.7	-4.5	21.0
1930—1940	-0.1	0.2	-1.9	-2.1	11.0
1940—1950	0.7	-0.3	-1.4	-4.5	25.5

(2) 合衆国生れの白人

	合衆国	北東部	中北部	南部	西部
1870—1880	—	-3.8	0.3	1.1	38.8
1880—1890	—	-2.0	-0.3	-2.8	45.6
1890—1900	—	0.7	-2.5	-0.1	16.9
1900—1910	—	-1.2	-5.1	-0.5	44.1
1910—1920	—	-0.9	-0.6	-2.9	16.8
1920—1930	—	-0.8	-1.6	-3.0	19.0
1930—1940	—	-0.6	-2.3	-1.3	12.9
1940—1950	—	-3.1	-3.7	-2.1	23.7

(3) 外国生れの白人

	合衆国	北東部	中北部	南部	西部
1870—1880	34.1	26.6	39.6	27.3	70.8
1880—1890	57.2	56.3	57.4	36.9	84.7
1890—1900	31.7	41.4	22.8	29.9	30.2
1900—1910	50.8	58.4	34.8	51.4	90.2
1910—1920	21.7	18.9	20.0	36.9	33.1
1920—1930	17.8	18.7	13.3	9.7	32.3
1930—1940	-0.9	0.5	-2.8	-4.7	0.3
1940—1950	8.5	4.7	2.8	37.7	25.4

(4) 黒人

	合衆国	北東部	中北部	南部	西部
1870—1880	—	15.6	15.7	-1.6	0.0
1880—1890	—	22.6	7.3	-1.3	0.0
1890—1900	—	47.0	11.4	-2.6	0.0
1900—1910	—	28.8	12.7	-2.5	66.2
1910—1920	—	43.8	51.5	-6.0	59.1
1920—1930	—	60.2	53.8	-9.8	52.1
1930—1940	—	17.7	12.0	-4.3	45.7
1940—1950	—	35.3	44.0	-14.8	208.1

移動率は期首人口により算出。

として利用できる(Lee et al. ; 1957, Eldridge & Thomas ; 1964)。期間は1870年から1950年までの80年間にわたっており、合衆国生れ白人、外国生れ白人、黒人、この三グループに関してデータが得られる¹²⁾。両系列は推計方法が異なるのだから推計結果の一致は保証されない。今、両系列が重なる1940—50年の数字を比較して見るならば、黒人人口では高水準での一致が見られるが、総計では大きな食い違いがあらわれる。特に北東部では一方では流出、他方では流入という根本的なくちがいが見われている。ところで人口移動を白人と黒人とに分けて比較して見るならば、前者の流出、後者の流入という点では一致している¹³⁾。それゆえ数値そのものにあまり大きな信頼を置くわけにはゆかないが、各グループごとの移動の方向だけはだまかに窺い知ることができるだろう。ここでまず最初に1950年までの各グループの移動の動向について見ることにしよう。

合衆国生れの白人。北東部・中北部・南部のいずれもほぼ一貫して人口を流出させている。この流出人口は最終的には西部へ流れ込んでいる。それゆえ、合衆国生れの白人においては西への人口移動が常に優位を占めていたと考えることができる。

外国生れの白人。合衆国の項に掲げた数字は国外からの純移民数を指すわけである。1930年までの時期、いずれの地域においても外国生れ白人の純移動率はきわめて高い。しかし移民の地域的分布状態を見るならば、移民の純流入数のうち80%近くは北部への流入であったことがわかる。1930年代は長期的不況の影響で純流出が生じていることがわかるが、第二次大戦後再び移民の流入が開始される。しかし今度は南部および西部への純流入数が増加して

表13 国内人口移動(純移動)の推計Ⅱ, 1940—1980

(1) 総計* (千人)

	合 衆 国	北 東 部	中 北 部	南 部	西 部
1940—1950	1,342	290	-330	-2,137	3,520
1950—1960	2,537	285	-149	-1,416	3,817
1960—1970	2,199	92	-890	426	2,570
1970—1980	—	-2,828	-2,368	3,593	1,601

(2) 白人

	合 衆 国	北 東 部	中 北 部	南 部	西 部
1940—1950	1,522	-173	-948	-538	3,181
1950—1960	2,668	-211	-690	57	3,512
1960—1970	2,284	-520	-1,272	1,806	2,269
1970—1980	—	-2,515	-2,252	3,362	1,406

(3) 黒人

	合 衆 国	北 東 部	中 北 部	南 部	西 部
1940—1950	-180	463	618	-1,599	339
1950—1960	-131	496	541	-1,473	305
1960—1970	-85	612	382	-1,380	301
1970—1980	—	-239	-103	209	132

* 1970年までは白人と黒人の合計。1970—80年は全人種。

U.S. Bureau of the Census ; 1971, 1981

おり、地域的分布における平等化が生じていることがわかる。

黒人。合衆国生れの白人とはパターンの逆には、南部から他の三地域への移動が一貫しているのがわかる。さらに純流出数および純流出率は1930年代を別にすれば、拡大しつづけていることが判明する。流出した黒人は第二次大戦まではそのほとんどが北部に向っていたが、戦後は西部へ向う割合が飛躍的に増大した。

それでは1950年以降、これらの集団の移動パターンはどのように変ったか。残念ながらここでは白人と黒人を比較することしかできない。まず白人の方は、1940—50年は三地域から西部へと人口を流出させていたが、1950年代、南部は人口流入地域へと変る。そして1970年代に入ると南部は西部よりも多くの人々を流入させ、北部から南部への流れが白人の人口移動の主調となる。これに対して黒人グループは、1960年代まで多数の人々を流出させ続ける。流出先としての西部のシェアは1950年以降は拡大せず、北部が2/3以上を確保しつづけている。しかし1970年代に入ると、急激な方向転換が生じ、北部から南部への移動が最大の流れとしてあらわれてくる。

ここでこのような人口移動の流れと都市化のパターンとの関係について考察してみよう。アメリカ合衆国における都市化は一応次のような諸段階をたどっていると考えることができる。第一には都市へと人口が集中化する段階、第二には都市の中心から周辺へと人口が分散してゆく段階が考えられる。前者が19世紀的な都市化の様態であるとするれば、後者は20世紀の初頭(1920年頃)から明瞭になってゆく郊外化の様態である。この第一および第二の段階は主として北部の大都市において展開されていたものだと考えることができる。ところで、1970年に入ると都市化の新しい展開が見られる。その特質は次の二側面においてとらえることができる。第一には大都市圏そのものゝ人口停滞・人口減少、第二には南部における人口流入および南部の中規模都市圏の急激な成長である¹⁴⁾。つまり第三の段階においては大都市圏の成熟・衰退という局面と、地域間人口移動の流れの逆転という局面が複合して現われていると考えることができる。

第一段階の集中的都市化に一番大きな貢献をしたグループは言うまでもなく移民系白人である。前記表6にかかげたように、1920年時点において全体の人口において1/3を構成している移民系白人人口が、50万以上の都市においては実に全人口の2/3を占めており、その集中率は2倍にも及んでいる。ところで1920年という時点は三つの意味で転換点に当たっていた。第一に、移民規制により移民系人口がピークから下降へと向う直前であったこと。第二に、都市への人口集中から郊外への人口分散へと都市化のパターンが変化していったこと。そして第三に、南部の農村から北部の大都市への黒人の大移動が始まった直後であったこと。

ここで郊外化の過程における白人と黒人の人口増加パターンを比較してみよう。表14は1960年時点で人口規模が25万人以上の標準大都市圏(SMSA)について、境界を固定させたまゝ、1900年以降1960年までの人口増加率の変化を、人種別および中心市・郊外の別に表示したものである¹⁵⁾。この表で見ると1910年代にはすでに白人と黒人の間には対照的な人口増加のパターンが現われている。白人人口はより多く郊外へと向うのに対し、黒人は中心市へと流入してゆく。しかもこのような対照は1930年以降ますます極立ってゆく。ここで北東部に話を限定するならば1950年代には中心市から白人の純流出がすでにおきているにもかかわらず、黒人の流入は50%を越す勢いで進行しているのである。それゆえ郊外化とは白人人口の郊外化であり、同時期に黒人の中心市集中は速いスピードで進行したのであり、さらに中

表14 標準大都市圏 (SMSA) における人口増加率, 1900—1960

(1) SMSA		(%)				
	1900—10	1910—20	1920—30	1930—40	1940—50	1950—60
全人口	33.5	26.3	28.3	8.7	22.6	26.5
白人	34.3	26.0	26.8	8.0	20.3	23.8
黒人	25.2	35.0	49.2	18.5	48.9	50.2

(2) 中心市						
	1900—10	1910—20	1920—30	1930—40	1940—50	1950—60
全人口	37.6	27.9	24.7	5.4	13.5	8.3
白人	37.9	26.9	22.2	3.9	9.3	1.4
黒人	36.4	45.8	57.6	20.7	52.1	53.0

(3) 郊外						
	1900—10	1910—20	1920—30	1930—40	1940—50	1950—60
全人口	26.3	23.1	35.6	14.9	38.2	52.2
白人	27.7	24.2	36.0	15.2	38.2	52.7
黒人	7.3	12.9	27.1	11.2	37.7	39.1

1960年において人口25万人以上の SMSA について計算。

U. S. Bureau of the Census ; 1963 より再集計。

心市から人口が溢れるようにして黒人の郊外化も遅れて始まっていったのである¹⁶⁾。

第三の段階においてもやはり同じ様な展開の徴候が見える。白人人口はすでに1950年代において南への純移動を開始していたのであるが、同時期、黒人は北部へ大量の人口を送り出し、20年遅れて同様のパターンをとり始めるようになったのである。このような遅れは単なる時間的遅れにとどまらず、常に白人のあとに入りこむしかないという不利な状態に置かれることをも意味する。

都市化とは通常、農村から多量の人口を都市に引き寄せることによって生まれてくるプロセスである。ところでアメリカ合衆国における都市化は農村の分解・移動が民族および人種を横断して実現したところに特異性があると同時に、そのことが都市化のプロセスの一断面を際立たせてくれるように思われる。第一に、巨大都市が成立する19世紀末から20世紀にかけての移民の圧倒的多数は東欧・南欧の農民であった。そして、第二の供給源となったのは南部の農村に滞留している黒人であった。アメリカの都市化は単なる農村から都市への人口移動であるだけでなく、以上のような二側面を常に含んでいたのである。急激な都市化はそれだけでも社会的・文化的摩擦を引き起こすが、このような特殊性はその摩擦をさらに倍加させると考えられる。

ところで、この二要素は根本的に異なる側面がある。移民はやがては移民でなくなるが、しかし人種の差異は永続する。1920年という都市化プロセスにおける転回点は両集団の運命そのものの分岐点でもあった。移民の供給はこれ以後、非常に細まり、そのシェアは低下してゆく。さらにアメリカの都市への同化とともに彼らの生活も安定してゆき、さらに世代を重ねるにつれて彼らの郊外化も進んでいったと考えられる¹⁷⁾。黒人は郊外へと移動してゆく

移民たちのあとへと入り込み、かつそこに滞留していったのである。このような遷移のパターンをとりながら、移民集団そのものが拡散する中で、黒人や後には他の少数民族集団がヨーロッパ移民のあとを継ぎ、郊外化という都市の一般的傾向とは逆に、都市中心部にその人口を集中させることとなり、これが第二段階の都市化、すなわち郊外化現象のもう一つの側面を構成することになるのである¹⁸⁾。

註

- 1) 移民統計の様々な問題点については、U. S. Bureau of the Census ; 1975, pp. 97-98を参照。
- 2) アイルランド、ドイツは旧移民グループに、オーストリアは後者に含めてある。また、出身国別の分類は長期的に行う時は色々と無理がでてくるが、ポーランドは一時期両グループに分散している。
- 3) しかし同時に割当外移民に関する規定も作られた。アメリカ大陸からの移民はこれ以後割当外とみなされ、割当法の適用を受けない。Woofert ; 1933, pp. 36-7。
- 4) 中国人、日本人などは割当を一切与えられなかった。
- 5) 例えば第一優先条項は「合衆国市民の未婚の子供」であり、最大で移民枠の20%までがこの条項により移民を認められる。条項は全部で8項目あるが、大別すれば (1)合衆国市民の親族、(2)才能・職業、(3)亡命者、この3つになる。なお、1978年の改正により、東洋と西洋の別の枠立も廃止され両者合わせて29万人と改正された。戦後の移民政策については、Keely ; 1982 を参照のこと。
- 6) 戦後の移民の構成変化については Reimer ; 1981を参照のこと。
- 7) 例えば森 ; 1976, pp. 168-169にかかげてある Immigration Commission の調査に明らかに表われている。
- 8) 外国生れ白人については1850年より集計がなされているのでその数字を見ると1850年が全白人人口の11.5%、1860年が15.4%となっており、1870年-1910年が構成比の上で高原状のピークになっていると考えることができる。第二世代については、構成比の上でも、同一のパターンが20年ずれて現われている。
- 9) 「都市」に関する人口センサスの諸定義に関しては村山 ; 1982を参照。
- 10) しかしこのようにして大量に流れ込んだ黒人の存在は、今度は北部の都市内部に緊張をもたらすこととなる。かくして、1919年7月にはワシントンで、その直後に約束の地シカゴで人種暴動が勃発する。もはや熱狂はさめたが、しかし、北部がより大きな権利を与えてくれる限り、黒人たちの人口移動はなおも続く。
- 11) 推計方法は component of change method と呼ばれるが、簡単に言えば、この時点間の人口の差から自然増分を引いて移動数を算出するやり方である。具体的手続きについては Shryock & Siegal ; 1980, pp. 750-752を参照。
- 12) この推計は survival rate method による。すなわち、コーホートごとに10年間の生存率をかけて生存者数の期待値を出し、実際の人口との差から純移動数を推計する方法である。生存率は、人口センサスにより算出する。Lee et al. ; 1957 を参照。なお、本稿では Eldridge & Thomas ; 1964 に掲げてある修正された数値によっている。
- 13) 生存率法による1940-50年の白人の純移動数は、合衆国～西部においてそれぞれ 975, -596, -1203, -409, 3183 (単位千人) となっている。
- 14) くわしくは村山 ; 1982を参照。
- 15) ただし、中心市の境界は固定させていない。
- 16) 1970年代半ば頃に、黒人の中心市への移動率はマイナスに変化する。(Nelson ; 1979)

- 17) Burgess の同心円理論は郊外化へと合う都市の拡大を先駆的に理論化した図式だが、このような運動の重要な要素となっているのは、移民家族の世代内、世代間上昇移動による郊外化という要因である。(Burgess ; 1929)
- 18) Taeuber & Taeuber ; 1964 におけるシカゴの研究によれば、1930年から1960年までの30年の間、移民グループの居住隔離指数 (segregation index) は、旧移民・新移民とも縮小の方向へと向っているが、逆に黒人の指数は80ときわめて高い水準を維持したままである。さらに、1960年には、黒人と同様に都市内に隔離された集団としてプエルトリコ人が加わっている。

参 考 文 献

- 村山研一 ; 1982, 「都市化の長期趨勢と都市の構造変容」, 『松本平における社会結合の諸形態とその変動 (中間報告書)』 (信州大学人文学部)
- 森 杲 ; 1976, 『アメリカ資本主義史論』 (ミネルヴァ書房)
- Auerbach, Frank L. ; 1955, *Immigration Laws of the United States* (Bobbs-Merrill)
- Burgess, Ernest W. ; 1929, "Urban Areas", T.V. Smith & L.D. White (eds.), *Chicago : An Experiment in Social Science Research* (Univ. of Chicago Press), pp. 113-138
- Carpenter, Niles ; 1927, *Immigrants and Their Children 1920* (U. S. Government Printing Office)
- Eldridge, Hope T. & Dorothy Swaine Thomas ; 1964, *Population Redistribution and Economic Growth vol. III, Demographic Analysis and Interpretations* (The American Philosophical Society)
- Hutchinson, Edward P. ; 1949, "Immigration Policy since World War I", *The Annals* vol. 262, pp. 15-21
- ; 1956, *Immigrants and Their Children, 1850-1950* (Wiley)
- Keely, Charles B. ; 1982, "Immigration Policy", *International Encyclopedia of Population* (Free Press), pp. 309-315
- Kennedy, Louise Venable ; 1930, *The Negro Peasant Turns Cityward* (Columbia U. P.)
- Lee, Everett S. et al. ; 1957, *Population Redistribution and Economic Growth vol. I, Methodological Considerations and Reference Tables* (The American Philosophical Society)
- McKenzie, R. D. ; 1928, *Oriental Exclusion* (The Univ. of Chicago Press)
- Nelson, Kathryn P. ; 1979, *Recent Suburbanization of Blacks* (U. S. Government Printing Office)
- Price, Daniel O. ; 1969, *Changing Characteristics of the Negro Population* (U. S. Government Printing Office)
- Reimers, David M. ; 1981, "Post-World War II Immigration to the United States : America's Latest Newcomers", *The Annals* vol. 454, pp. 1-12
- Rosenblum, Gerald ; 1973, *Immigrant Workers : Their Impact on American Labor Radicalism* (Basic Books)
- Scott, Emmett, J. ; 1920 *Negro Migration during the War* (Oxford U. P.)
- Shryock, Henry S. & Jacob S. Siegal ; 1980, *The Methods and Materials of Demography* (rev. ed.) 2vols. (U. S. Government Printing Office)
- Taeuber, Karl E. & Alma F. Taeuber ; 1964, "The Negro as an Immigrant Group : Recent Trends in Racial and Ethnic Segregation in Chicago", *AJS* vol. 69, pp. 374-382

- U. S. Bureau of the Census ; 1963, *U. S. Census of Population 1960, PC(3)-ID Standard Metropolitan Statistical Areas* (U. S. Government Printing Office)
- ; 1971, *Current Population Report p-25, no.460, Preliminary Intercensal Estimates of States and Component of Population Change, 1960 to 1970* (U. S. Government of Printing Office)
- ; 1975, *Historical Statistics of the United States: Colonial Times to 1970* 2vols. (U.S. Government Printing Office)
- ; 1981, *Statistical Abstract of the United States, 1981* (U. S. Government Printing Office)
- Wittke, Carl ; 1949, "Immigration Policy Prior to World War I", *The Annals* vol. 262, pp. 1-10
- Woofter, T. J., Jr. ; 1933, *Races and Ethnic Groups in American Life* (McGraw-Hill)